

論文

高等学校における学際的な学びについての一考察

—総合的な探究の時間を中心として—

A Consideration on Interdisciplinary Studies in High Schools:
Focusing on Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study

浅見 和寿

Kazutoshi ASAMI

Key words: 高等学校, 学際的な学び, 総合的な探究の時間, SDGs, 教科横断

1 はじめに

文部科学省が「これからの高等学校教育について」(令和2年11月25日)の中で、普通教育を主とする学科の弾力化・大綱化を普通科改革として示している。資料によれば、現在「普通」の名称から生じる一斉的・画一的な学びの印象があり、多くの生徒がいわゆる文系・理系に分かれ特定の教科について十分に学習しない傾向があるという。確かにそのとおりであり、何か手立てを講じる必要がある。

同資料では、特色・魅力ある教育内容を表現する名称を学科名とすることを可能とし、どのような学科を設置するかについては、各設置者が検討すること、また、一人一人の生徒にとって将来のキャリア形成に必要となる科目の学習の機会が確保されない状況を改め、総合的な探究を軸に教科等横断的な学びが重要だとし学科設置の例として下記の3つを挙げている。

【学際的な学びに重点的に取り組む学科】

現代的な諸課題のうち、SDGsの実現や Society5.0 の到来に伴う諸課題に対応するために、学際的・複合的な学問分野や、新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

【地域社会に関する学びに重点的に取り組む学科】

現代的な諸課題のうち、高等学校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

【その他特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科】

その他普通教育として求められる教育内容であって当該高等学校のスクール・ミッションに基づく特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

どのような学科を設置するかについては、各設置者(教育委員会等)になるため、一個人では変えることはできない。しかしながら、学際的な学びについては、現在までも、先生方が取り組んできた内容のものであり、これからも継続して取り組んでいくことができるものである。

本稿では、この学際的な学びに重点的に取り組む学科に着目し、そもそも学際とはいつから考えられてきた概念なのか、また、学際的な学びとはどういった学びなのか、高等学校における授業実践の事例とともにまとめていく。本稿では主に総合的な探究の時間を活用した事例を紹介していくが、一部教科の授業時間を活用した教科横断型の事例も合わせて紹介し、形態的な分類をしていく。

2 学際とはどういう意味か

そもそも学際とは、どういう言葉なのか。日本大百科全書（ニッポニカ）の「学際的研究」の項目には次のようにある。

「学際」interdisciplinary とは、本来、学問の一専門領域とそれに隣接する他の領域の間に存在する中間領域を意味する。したがって、その中間領域の研究を試みようとするのが学際的研究ということになる。しかし一般的には、学際的研究は、一つの目的と関心のもとに、多くの隣接する学問領域が協業して研究するものとされている。（日本大百科全書）

また、「学際」という日本語が書名になっている文献として最古のものは『学際研究—社会科学のフロンティア—』であり、1971年に刊行されたものである。その後「学際」という言葉が書名につき、日本経営図書から「学際新書」というシリーズが出始めたのもこの頃である。赤司氏の『学際研究入門—超情報化時代のキーワード—』には、「明確な言葉として学際という概念が日本に上陸したのは1960年代で、それをもとにした研究が試みられ、概念として学界に広く定着しはじめたのは1970年代以降と思われる」という記述があるが、私が調査した中には、もっと以前に「学際」が使用されているものがある。例えば、『醫學中央雑誌 *Japana centra revuo medicina* (50)』（医学中央雑誌刊行会）には「～産業工芸或は、思想学問の学際的流通に限らず～」という文が存在する。また、『国語科学講座 第2(8)音聲学 音聲学概説 音声学』（明治書院）「音聲研究の分擔と協同」の項目の中では次のような形で使用されている。（旧字体のものは新字体に改めた）

もとより各自の最も得意とする方面に手腕を発揮するということは、当然でもあり、効果的でもあるが、その際音声研究の全分野における自己の担当区域の地歩と意義とを正答に認識することを怠るならば、時として無益な努力を重ねるということがないと保証は出来ない。ことに音声の問題のような、科学的考察の歴史のすこぶる新しい事柄に関し、とりわけ学術の国際的競争裡ではまだ後進のわが学界において、科学的協同作戦の利益、**学際的**智的協力の必要を痛感しなければならぬ。

内容から見ても現在使用されている「学際」とほぼ同

じ意味で使用されていることがわかる。もしこれが、現在使用されている学際と同じであるならば、医学の分野では明治、音声学の分野では、昭和の時代から使用されていることがわかる。わずかな資料ではあるが、このことから推測するに、学際的な研究及びその学びの必要性は昔から説かれていたといえることができる。

3 現在の学際的な学びとは

文部科学省「これからの高等学校教育について」では、現代的な諸課題に対応するために、「各教科・科目」・「学校設定教科・科目」・「総合的な探究の時間」を関連付け、地域社会が有する魅力に関する学びや社会的課題等を踏まえた目標の設定を挙げている。

上記のような学びを実現するためには、どのようにすればよいのか。同資料によると、最前線で課題解決に取り組む社会人の姿に学んだりすることが非常に重要であるとし、関係機関との連携や協働を行うことや、またその調整をするコーディネーターの配置が記載されている。具体的には、国内外の高等教育機関や国の機関、NPO法人や企業等が挙げられているが、令和2年度から始まった「社会教育士」の称号についてもこのような背景に合わせて進められているのではないかと推測できる。

本稿では、どの学校のカリキュラムにも共通しておかれている「総合的な探究の時間」を中心に、高校現場で既実践されている事例を紹介し、分類することで、学際的な学びをより具体的に考えていく。

事例1 国際交流（オンライン）

テーマ：多様な他者と協働し課題解決に取り組む力をつける

キーワード：SDGs、国際連携、企業連携

関係機関：JICA、東武トップツアーズ、NGO GRAPHIS 県・市・学校図書館、国際日本文化学園等

概要：日本の高校生とカンボジアで日本語を学習している学生（国際日本文化学園）とオンラインで交流した。各図書館から貸し出しをもらった100冊以上のカンボジアに関する書籍で事前学習した後、JICAがSDGsの概要や、カンボジアが抱えている問題について講義やワークショップを実施した。サポートとしてカンボジアで医療支援をしている学生団体であるGRAPHISにも協力してもらった。カンボジアの学生と交流した後、実際自分たちがカンボジ

アに支援に行くとしたら、どのような方法があるかというテーマを東武トップツアーズに任せてもらい、行程を一緒に考察した。

事例1を学際的な学びの視点から考えると、国際機関としてJICAが、企業として東武トップツアーズ、NGO法人としてGRAPHISに協力してもらい、国内外の教育機関として朝霞高等学校(学校図書館を含)、国際日本文化学園、県や市の機関として図書館が活用されている。

赤司氏の著書で取り上げられている形態的分類に即して考えれば、「複数的学際性」ととらえることができる。今回の例は、JICAが主導的役割を担い、それを各分野の専門の方が付随し補完しているような状態である。

事例2 各年代・各業界の方との対話(メタバース)
 テーマ: 様々な他者と対話することで、現在の自分を振り返り、より良い人生とは何なのか思考する態度を育成する。

キーワード: 進路実現、人生設計、世代・業界横断
 関係機関: 公立小学校、weclip、JICA、BeCome、Relic、e-donuts、ディレクトフォース、他校の教員及び生徒

概要: 各年代・各業界の方に、メタバース内で講義やワークショップを実施していただいた。講義者の人生を振り返り、現在高校生である自分たちが何を考え、どう行動すれば良いのか、世代を超えて対話することで、より現実味を感じながら、自身について思考した。

事例2については、主に企業の関わりが多く、一般社団法人や、公立の小学校や高校の教員も関わっている。ここでは、企業の連携というより、人と人との連携であり、その人の所属が企業なのか、一般社団法人なのかという違いだけである。先の事例と同様に分類すると、「多様な学際性」といえるであろう。個々の専門分野(ここでいうと個人及び業界)が平行的、無差別的に存在していて相互作用は少ない状態である。それぞれが独自に貢献している状態であるといえる。

事例3 教科横断型授業(対面)

テーマ: どうすれば皆が納得する議論ができるのか

キーワード: 教科横断、協調学習、ICT活用

関係機関: なし

概要: 「どうすれば皆が納得する議論ができるのか」のテーマについて、国語: 「他者を理解するという

こと」の評論を読み、社会は「パリ協定採択の合意形成過程」を学習し、英語は「集団が良い決断をする方法」をTEDの登壇者から英語で学び考察した。考察の方法としてジャムボードを使用し、自身の考えをまとめ、各教科で学んだ内容を協調学習(知識構成型ジグソー法)で学習した。

事例3は、総合的な探究の時間ではなく、各教科の授業で実践したものである。この実践では、関係する企業等との連携はなく、各教科の教員だけで、教科横断した授業となっている。この事例は、分類でいうと、「横断的学際性」ということができる。専門分野が並列してはいるものの、知識構成型ジグソー法という共通の手法の中で学習している。企業との連携はないが、これも学際的な学びということができる。

4 まとめ

本稿では、学際的な学びの実践例をもとに、形態的分類を行った。このような実践は、各学校で行われており、これからも増加することであろう。その中で設置者(各教育委員会)が各学校の特色を見極め、新たな学科を設置していくと考える。

今回は、実践例をもとに形態的分類をおこなったが、発展段階別分類に即して考えていくと、マルチディシプリナリの段階に近いと考える。次の段階である、インターディシプリナリに到達するような学際的な学びが、高校現場でも引き起こすことができれば、非常に良質な学びとつながっていくだろう。

《参考文献》

- ・『国語科学講座 第2(8)音声学 音声学概説 音声学』明治書院 1933年5月(p11)
 - ・『醫學中央雑誌 = Japana centra revuo medicina (50)』医学中央雑誌刊行会, 1907年4月(p1544)
 - ・赤司秀明・一松 信(監修)『学際研究入門—超情報化時代のキーワード』コスモトゥーワン 1997年10月(p50-61, 68)
 - ・「これからの高等学校教育について」文部科学省 2020年11月(p33-41)
- 《参考WEBサイト》
- ・JICA「翔んで!! 埼玉デスク vol.2 “カンボジアシェムリアップ州にある『国際日本文化学園』との繋がり”」

<https://www.jica.go.jp/Resource/tokyo/topics/2022/dit50g000003r2u.html>

・東京新聞「実社会が「学びの場」 高校の新授業「総合的な探究の時間」 朝霞高定時制、カンボジア生徒と交流」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/220228>

※授業実践の事例について、本稿の執筆者である浅見和寿が埼玉県立朝霞高等学校（定時制）で実践したものである。